

“人権の木”よ、大きく育て！

—— 未来ネットワークとわたし ——

久 木 原 豪（福岡県「子ども会議」）

赤ちゃんの輝く目がつらい

あなたは、赤ちゃんの目を見たことがありますか。赤ちゃんの目は、どんな水よりすんでいて、その目から放たれる輝きはまるで太陽のようです。そんな赤ちゃんの目を見ていると、なぜか、わたしはつらくなります。何というか、心の一番柔らかい部分をぎゅっと締め上げられるような、そんな気分になります。この何ともいいあらわせない感情こそが、わたしが未来ネットワーク、そして人権の木に携わる原動力となったのは、何とも皮肉なことです。

わたしは、未来ネットワーク企画に、幸運なことにその土台づくりから参加することができました。その企画段階途中で生まれたのが、あの人権の木です。わたしは、前々から子どもたちの生きた声をどうにかして多くの人に伝えることができないかと思っていました。そこで、思いついたのです。子どもの意見をそのまま自分自身の手で紙に書いてもらおう。そして、それを木の葉にして、一本の木をつくろう。木は、力強い生命の源。木は、豊かに葉を茂らせ、その下には、多くの生命が集まり、木もまた、その生命とともに育つ。そんな木になるようにという願いを込めて、人権の木を多くの人たちとともにつくったのです。

11月14日、わたしはそのような気持ちを胸に司会をしました。恥ずかしいことに、わたしはあのかの約三時間の時の記憶が、あやふやなところがとても多くありました。それだけ、自分に余裕がなかったのです。しかし、今おもい返してみると、結構いろいろなことがありました。予想以上の参加者が次々に会場に来てくれて、時には真剣に、そして、ほほ笑みながら自分たちの権利について考えてくれました。当日は、権利をテーマにしたビデオや劇が披露され、福岡県「子ども会議」の「子どもの人権宣言」作成の経過の発表など、いろいろな方向から権利というものをとらえることができたのではないのでしょうか。それを、少なからず人権の木に生かすことができたのは、司会をするものとしてうれしいことでした。

“人権の木”でちょっと救われた

人権の木の作成は、未来ネットワークの最後の90分ほどの時間のなかでおこないました。そこでは、多くの子どもたちが集い、名々話し合いながら、人権の木の葉に自分たちの声を写していました。なかには、無言のままの木の葉があったり、びっしりと書いてあったり、急いで書いた

ような、だけど辛そうな葉があったりしました。未来ネットワーク終了後、その木の葉は、大勢の人の目に写り、人の目を引き寄せました。その瞬間、わたしは本当に良かったとおもったと同時に、心の痛みも少しなくなった気がしました。わたしは今までいろいろなことから逃げていたのでしょう。だから、赤ちゃんのあの真っすぐな目を見ると自分が辛くなったに違いありません。わたしもまた、あの木に助けられた一人です。あの人権の木は一本ではありません。皆さんの心のなかにも一本ずつあります。その木をどうか皆さん強く育ててください。この木はいつでもわたしたちを見守ってくれます。あの赤ちゃんの目のように真っすぐあなた自身を。

人権の木

1) 学校のこと

〈登校拒否〉

- ・登校拒否してる人はなぜ来れないの!!
- ・登校拒否をしている人のことも考えてくれるようにしろ
- ・不登校も権利があるんだ!
- ・不登校は、いい? わるい? これって海より深い問題だよ

〈決まり〉

- ・靴が決められている 紺、白、黒いやだ
- ・校則をもっとやさしくしてほしい
- ・学校にいろいろ許可してもらう必要はないでしょ。管理されているみたい
- ・私服を認めてもらいたい
- ・生徒手帳にのってないことまで注意をするナ! 髪形なんてどうでもいいじゃないか
- ・生徒自身の手で校則を作り替えたい。生徒は先生のしもべじゃないぞ
- ・学校外でこうそくつくるな!
- ・子どもを学校外では、自由にしろ!
- ・きそく、こうそくないから大丈夫!
- ・間違えるな! 義務教育とは親が子どもを学校に行かせる義務であり、私たちが学校に行く義務ではない!

〈体罰〉

- ・入学説明会のとき「体罰のない学校です」といったのは誰だよ!! 髪染めたぐらいで殴るなー!!
- ・髪の毛茶色いからって8本もぬくな! 髪の毛は黒とはかぎらん! みどりにしたいな!
- ・学校でたいばつを、うけるのが、いやだ!! たいばつはんたい!!
- ・先生は、たいばつはいけないと言いながら自分はたいばつをしている

〈言いたい！〉

- ・絶対部活に入らなきゃおかしいぞなんて！ そんなの人の自由だー！
- ・学校や勉強意外に何か……。何かね っていうか学校が全部じゃないだろう
- ・部活に入っている人はよい人というような感じで見ないでください
- ・ピアスしてってもおこられない
- ・給食のマスクを忘れたら、チョークスリーパーをされた。むかつく！
- ・自分たちで先生を選ぶようにして欲しい
- ・3年と1年を比較しないで
- ・子どものしつけに責任をもて!! 無責任なPTA!!!
- ・休み時間がすくないぞー
- ・先輩と仲よかバッテン、学校に行くの楽しい
- ・生徒会はしっかりして下さい
- ・学校に、Steinway (スタンウェイ) and (アンド) sonsy (サンズ) を!! 設備充実!!
- ・宿題へらしてー
- ・学校のきょうしつでどたばたするな
- ・学校でクリスマスパーティーをしたい。でも先生にいったらだめといわれた
- ・楽しい学校がいいな

2) 先生へ

- ・先生も「先生」をとったら普通のおとなだから、学校にたいして不満があるなら立場を捨てて、堂々といてほしい
- ・授業のときに変な話をしないでください
- ・もっとまともな先生を増やして!!
- ・先生、生徒の話に乗れ！
- ・数学の先生、言葉が悪い!!
- ・担任の先生、いい先生!! すきよ
- ・先生の授業の進め方がへた
- ・先生さむいシャレやめよう
- ・先生はなにをしてもいいのか！
- ・学校のべんきょうで前の先生みたいにおもしろくしろ！
- ・音楽の先生がすごい
- ・先生、泣いてまで給食たべさせないで！ 口につっこんだり、そんなことじぶんにされて……いやじゃないですか？
- ・校長先生！ 学校にせんぶうきアンドストーブをつけてよ！ たんにんの先生もなっとくしてるんだからべつにつけてくれたっていいじゃん！
- ・マイクで、どなるな！

- ・学校の先生がおもしろくて休み時間中、昼休みもしょくいんしつまんぱいです
- ・先生がわる口を言った。私は、いつも先生が、人に、わる口を言うなと、言っているのになんで先生がわる口を言うのだ!!
- ・先生とわかりあえることをめざそう
- ・先生、授業はわかる言葉でおねがい
- ・英語の先生の発音が悪い
- ・校長、話がながいぞ
- ・先生がわたしたちの悪口をいったのがいやだった
- ・先生!! あきらめるな! さじをなげるのははやすぎるよ!

3) 親に言いたいこと

- ・お母さんお小遣い増やしてよ、無駄遣いしないってば! 私をちゃんと理解してよ!
- ・お母さんけんかしたとき「生意気」って私に言うのおかしいよ。ほんとに何もわかっていないよ!!
- ・お母さん、いい母になるために「武田イク」さんの講演会に行つて欲しかった。イクさんうちのお母さんに教えてやってよ
- ・両親へ
もっと、若い人の意見を納得できるような頭のやわらかい人になってください。 娘
- ・親に先生のいやな所を相談する

4) 友達関係

〈いじめ〉

- ・いじめている人もつらいのにいじめられているひとばかりかばうなよ。両方とも考えてやれ

〈言いたい!〉

- ・大声でわるぐちや人のいやがるたいどをするなよな
- ・友だちのことわるぐちいうのやめよう
- ・友人Tへ、休めリラックスしろ
- ・友達をいっぱいつくりたい

5) 自然や環境のこと

- ・わたしたちの住むかんきょう。ゴミが多い!!
- ・ポイすてやめよう!
- ・いま自然破壊されていて、未来がどうなるか分からない

6) 私のこと

- ・外見だけで人を見ないでください!!

- ・わたしはわたし、人間性をわるくいうな
- ・アメリカ行きたい。この会に来た人と少しでも多く交流したい。活動を話し合いたい
- ・わたしを表現させて！
- ・男がほしい!! でもなんで男がいないの! あいて募集中! 男欲しいぞー!
- ・わたしたちに意見を言わせて！

7) 私はこれが言いたい!!

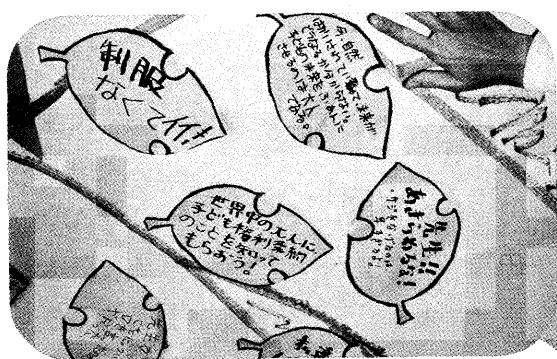
- ・気軽におしゃべりできる人たちに囲まれていたらHAPPYかも
- ・子供の未来を不安にさせるのは大人（おとな）である。制服なくていい!
- ・眠らして!
- ・固められた意見をもう一度最初から見直してみようよ
- ・ひいきするな
- ・子どもだからというな
- ・大人（おとな）も差別してるやん!
- ・司会やらせないで!
- ・むじゅんしたことばり言うな!!
- ・子どもは、大人（おとな）のおもちゃじゃないぞ!!
- ・ほめる時はほめておこる時はおこる
- ・先生のイヤなところを親に相談しよう!
- ・じんけんのドラえもん（が言う）>四次元ポケットがほしい!!!!!!
- ・思ったことはきっぱりいやと言おう
- ・だまっていちゃわからない。まずは話すことから
- ・好きな人がいればそれでよし
- ・ちくしょう
- ・もっと遊びたい
- ・たばこをむりなくやめたい・・・大学生
- ・やらなくちゃがやりたいことになるようになりたい
- ・忘れ物をしたくらいで首を絞めるようなことをなぜするのか。子どもも人間である。やりたいこと自分の体を輝かせること。たとえばエステにいったりあかすりにいったりの外側をピカピカにするのもやりたいし、映画を見たり、おいしいものを食べたり、物欲的ピカピカは簡単にできることだけどなかなかできないのもうひとついま女性問題を中心に学んでいるけどそれはやらなくちゃいけないことかなと思っているので続けたい
- ・「やりたいこと」一日中寝たい

8) 社会のこと

- ・皆が輝ける場所をたくさん作ってあげたい

- ・バイト代をあげてほしい！
- ・世界中のおとなに子どもの権利条約のことを知ってもらおう！
- ・意見表明権の確立を
- ・少年法についてしっかり話を!!
- ・子ども料金はどーして12歳までなのか!!
- ・わたしたちのことをバカっていうな。バカじゃないぞー！
- ・子どもの意見をもっと主張して欲しい
- ・夜遊びしているだけで、「不良だ」なんて言わないで

(原文のまま)



第1分科会「子どもの権利条約入門ワークショップ」

担 当：国際子ども権利センター

副代表：栗 本 敦 子

記録者：重 永 侑 紀

参加者：40名程度

「子どもの権利条約入門ワークショップ」の分科会の部屋に様々な年齢層の人たちが入室してきました。初めて出会う人たちと今から一緒に活動するであろう緊張感を持ちながらの入室であるように見受けられました。ファシリテーターである栗本さんが参加者たちに何げなく語りかける言葉が、自然とリラックスした雰囲気にならせていくのが見ていた私に伝わって来ました。

参加者はそれぞれに「子どもの権利条約」とは何たるかを知ろうと肩に力が入っていたと思われましたが、「権利」の話は掛け離れたところから始まり、徐々に参加者全体に一体感が生まれ、その中でこそ感じられる“「子どもの権利条約」の必要性”だったように思います。また、グループ討議の場面では年齢の上下を感じさせない一個の人間同士として話し合いがもたれ、横から観察していた私には心の底から感動を体感しました。このように人としてお互いに尊ばれる存在だと自信をもてる社会的場面が家庭／学校／地域で多くなることを願わずにいられない空間と時間でした。

それでは、具体的にどのようなワークショップが進められたのか、みなさんにご紹介したいと思います。

1：準備

まず参加者が入室したおりに、B4サイズの紙に下記の5点を記入してもらいます。

- ① 名前
- ② どこから来たのか
- ③ 何を期待して来たのか
- ④ 得意なこと
- ⑤ 普段は何をしているのか

2：ウォーミングアップ

椅子を部屋全体に円にセッティングする。

参加者全員が真ん中に出て、ジャンケンをする。

ジャンケンは、できるだけ相手の心を読んで、アイコになるように持ち込む。

アイコになったら、あいさつをして先に用意したB4の紙を相手に見せながら、自己紹介をして握手をして次の相手を探す。

これを繰り返しほぼ、大体の人とジャンケンし終わったら終結。

日頃何げなく遊んでいるジャンケンも、心を合わせようと意識をして行くと、なかなか難しいものです。しかし、不思議と相手と同じものを出そうと意識をすると、相手の目や、相手の癖を見いだそうと、ものすごい集中力を発揮することが体験できたウォーミングだったようです。

3：ワ　　ー　　ク

① 好きな季節ごとにグループになって集まる。

ファシリテーターが「どうしてその季節が好きなのか」インタビューする。

② 今後は口を一切開かずにグループになる。

ファシリテーターが言葉がない状態で意志の疎通を図ることについて、「どのような気持ちだったか」などインタビューする。

◇同じ血液型どうして集まる。

◆当日の会場である「あすばる」から自宅が遠い人から順番に並ぶ。

◇1月1日をスタートとして誕生日の順番に並ぶ。

◆好きな色どうして集まる。

言葉を用いずに、自分が何を考えているのか、相手が何者なのかを探ることがこんなに大変なことだとは・・・という感想が多かったです。そういった感想を基に、日ごろの人間関係で言葉以外のメッセージを多く発信しているのでは、と心配になった人もいました。また、手話との比較の話もとび出しました。

③ もう一度、円になってファシリテーターが参加者の背中にシールを貼る。

シールは赤／青／緑／白をほぼ均等に貼る。

ただし、赤と青／青と緑／緑と白／白と赤のように2枚組のものを一人ずつ貼る。

これまで同様に口を聞かずにグループになる。

このワークにはいくつかのプロセスがありました。まず、自分の背中にシールを貼られるという不安を参加者が表情に出していました。自分が何者なのかわからないという不安です。自分が自分をわからないのに、人からは自分がわかってしまうのです。それを利用して、相手からは自分がわかるのだ、と次のプロセスに移って行く様が傍からは、よくわかりました。そこからは、ものすごいスピードでお互いに共通項を持っているのか、いないのかの二者選択で機械的に選別が行われました。人は自分と同じか同じじゃないかを選択の基準にしているときは、相手の気持ちを思いやるなどの判断を停止して、力任せに他人の背中を引っ張ってみて自分と違うと思いきや、パッと投げ捨てるように次の人へ移っていくのです。また、いったん同じ色のグループができあがってしまうと、この既成のグループを壊したくないという心理なのか、4色のグループが丸く

小さく固まって動こうとしなくなりました。まさに世界の民族紛争のなりたちを見るかのようなできごとでした。しかし、2色のシールをつけた人が4人残っています。彼らは不安な面待ちです。「2色」という共通項でグループを作ろうとはしますが、やはり、それでも何か違うという思いがあって、どこにも属することのできない不安のピークを迎えていました。ところが、ふっと高校生がひらめいたように立ち上がって、2色組を各色のグループとグループの間に力強く入れ込んでいきました。そのときの参加者の色めき立ったことといたら……。後で2色組の参加者が語ってくれました。「彼が救世主に見えました」と。傍らで見ていた私には、4つの輪と2色組みの4人が一つの輪に大きく広がって行く様子は人間のすばらしさを直に見たようで鳥肌が立つほどに感動しました。一見お互いの違いが溝を作っているように見えても、“人と人とながらいたい”との思いで知恵を働かせ一つになることができるのだ、体感できた一瞬だったと思いました。

4：グループ討議

- ① 子どもの写真を見て、その子どもが何をしてほしいと思っているのか考えよう。

(「子夢子明」の表紙の子どもの写真を利用)

- ② それぞれのグループで考えたことを板書する。
③ 板書を見ながら、「子どもの権利条約」と結び付けて討議する。

《3つのPについて》

- ・ 付与の権利 (Provision)・・・生存／発育に必要な物／サービスを与えられる
- ・ 保護の権利 (Protection)・・・搾取／抑圧等有害な行為／慣行から守られる
- ・ 参加の権利 (Participation)・・・自己の生活に景響のある決定や社会活動に参加

《子どもの最善の利益》

「その子その子が、それぞれの局面において、その気になって、他人とのかかわりの中で自らの分別によって、自分の持ち味を出して行けること」

→おとなはそのような環境をつくり子どもたちが「その気」になるのを手助けする。

「その気」になるために・・・ありのままの自分を肯定され受け入れられること。

《条約普及への5つのハードル》

- I 自分自身のハードル：権利行使の前提である「自己信頼感・肯定感」の弱さ「がまん」強さ
- II 仲間のハードル：他者への共感の問題／権利行使をする子どもが孤立する事実
- III 受験のハードル：「受験の絶対視」と「内申書」
- IV 情報のハードル：条約広報の弱さ／「おとな語」から「子ども語」への第2の翻訳作業の必要／知識として知るだけでなく生きた情報へのアクセスを
- V おとな（社会）のハードル：「子どもゆえの人権制限論」と「権利行使＝わがまま助長論」
→ハードルを越えるために市民による条約実施の検証を→権利委員会への「オルタナティブ・レポート」に向けて一人一人の内なる批准＝おとなの子ども観の問い直し

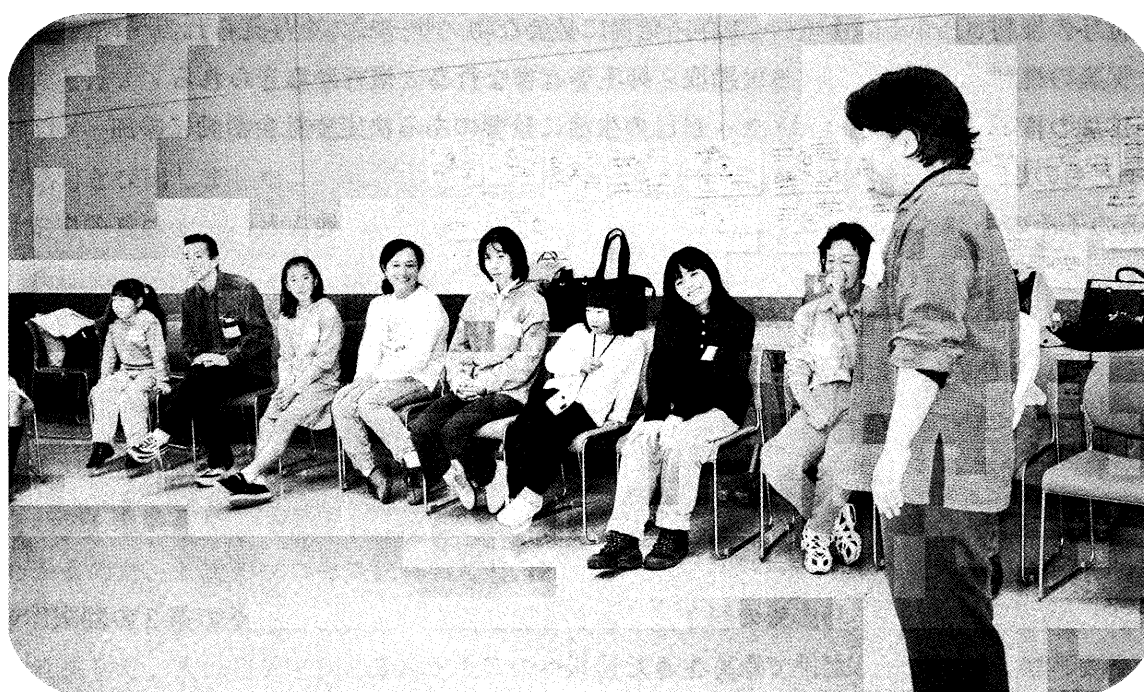
地球的視野をもった人権教育を「気づき」を基にした学習

- ④ 家庭や学校で起こっている困った事をテーマにして、ポジティブな発想でどうしたらクリアできるのか考える。
- ⑤ これを表にしてグループごとに発表する。

あるグループでは、親子関係がうまくいっていないことをテーマに上げていました。そこでは多様な人達と話し合っていく中で、親子での会話が不足していることで小さな気持ちのすれ違いが起こっていることに気が付き合いました。自分の気持ちを出発点に、相手の行動をよく知ろうとし、そして、気持ちを語り合うことが意外に軽視されている状況に気づいたようでした。「～してもらっていない」から「～ができる」発想の転換でもあったようでした。

参加者の一人一人が人権を尊びたいと願っていることがこの分科会の共通項だったために、年齢や職業や性別の違いをお互いに受け入れてグループ討議が行われました。小さな小学生がおとなたちと同じテーブルで対等に討議している姿こそが、私たちの願っている世界の姿なのではないでしょうか。

対等な関係を実現するための生活の安定と自己肯定をできるための機会と経験と、自由な表現と行動の選択とが子どもの側に提供できればきっと、分科会のグループ討議で見られたような社会が実現できることでしょう。



第2分科会「CAPプログラム」

— No・Go・Tell 僕たち、私たちがイヤだなと思った時に困らないためのプログラム —

担 当：ふくおかCAP

記 録 者：渡 辺 章 子

参 加 者：52人

(内訳 大人25人 子ども27人

低学年15人・高学年6人・高校生6人)

私たちふくおかCAPは、主に小学校を中心にCAPプログラムを実施しています。CAPとは、Child Assault Prevention（子どもへの暴力防止）の略です。CAPプログラムは、子どもワークショップ・おとなセミナー・トークタイムの3つで構成されるプログラムで、この中の子どもワークショップでは、人が生きていくために欠かせない「権利」について中でも大切な「安心・自信・自由」という3つの権利についてや、様々な暴力に出会った時どんなことができるのだろうかということなどをロールプレイ（役割劇）やディスカッション（討議）をしながら子どもたちと一緒に考えていきます。

今回のフォーラムでは、低学年（小学校1～3年）と高学年（小学校4～6年）の2グループに分けて、子どもワークショップを行いました。また、高校生に受付を手伝ってもらい、見学という形でワークショップにも参加してもらいました。

『みんなには、どんな「けんり」があるかな?』との質問に『うんちする』『息をする』『水を飲む』『遊ぶ』『「けんり」は、自分だけの大切なもの』などなどいつものように子どもたちから元気なたくさんの意見が出ました。また、子どもたちにロールプレイにも参加してもらうのですが、自分の言葉で劇に参加してくれました。

子どもワークショップと一緒に必ずおとなセミナーも行うのですが、今回は、模擬ワークショップを行った後、いつもと少し趣を変えて、グループディスカッションを行いました。年齢層も普段学校で行う時は、どうしても保護者の方中心なので30～40代の女性を中心になるのですが、今回は、大学生などの若い方や男性の参加もあり、私たちも学ぶところが多かったように感じます。

子どもワークショップの中では、子どもたちにいつも「困ったときは、信頼できるおとなの人にお話しましょう」そして、「最初に話した人が信じてくれなくてもみんなのこと信じて助けてくれる人は必ずいるから、諦めずに話し続けましょう」と伝えます。私は、ワークショップに参加する度に、子どもたちが信頼できるおとなの人が身近にいますようにと願っています。そして、少しでも多くのおとなの人が、子どもたちの声に耳を傾けてくれるといいなと思っています。

今、おとなであっても自分の権利を守ったり、自分自身の大切さを考えることは難しいのでは

ないかと思います。私は、このCAPプログラムを一人でも多くの子どもたちに受けてもらいたいと願うと同時に、子どもたちの身近にいるおとなの人たちにも“権利ってこんなもの”ということを伝えていきたいと思っています。そして、子どもたちの話に向き合い、真剣に耳を傾けてくれ、子どもと手をつないでいけるおとなの人が、少しでも増えてほしいと願います。

CAPの活動を通して「権利」・「自分自身の大切さ」を伝えていくことで『子どもの権利条約』の実現のお手伝いができたらいいなと思います。今、中高生向けの暴力防止のプログラムの準備も進んでいます。これまで以上に私たちの力も試されることと思います。でも、たくさん子どもたちと出会えることを楽しみに頑張っていこうと思います。

関係書籍

『「ノー」をいえる子どもに』 童話館出版 1995年

著者 サリー・クーパー 監訳者 森田ゆり 訳者 砂川真澄

『エンパワメントと人権』 解放出版社 1998年 著者 森田ゆり

『子どもの虐待』 岩波ブックレット 1995年 著者 森田ゆり

『あなたが守るあなたの心・あなたのからだ』 童話館出版 1997年

作 森田ゆり 絵 平野恵理子

